
愚帝 フェデル

karon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愚帝 フェデル

【Nコード】

N4297W

【作者名】

karon

【あらすじ】

封鎖された王国に私はある人を探しに来た。

しかし、何故か私は見知らぬ部屋に見知らぬ少女と監禁されていた。

1（前書き）

少々陰惨な展開になります。最初からマイナスポイント言っているでしょうか。

それではよろしく願います。

その王国にはひとつの伝説があった。愚帝フェデルの御世に、王国は滅ぶと。

私は、どうしてここにいるのだろうとしばし悩んだ。

私がいるのは簡素な部屋の中だ。前方の扉を除けば窓もなく家具は小さな机や椅子と箆筥くらいしか見当たらないその部屋の狭苦しい寝台の上に私は眠っていた。眠る前の部屋も簡素だったが、明らかに別の部屋だ。昨日の部屋はただ家具を並べただけの代物だったけれど、この部屋にはやや生活臭がある。机の上のマグカップとその奥の小さな男性の肖像画や何度も読んだと思しい本、壁がどこかすすけている。

そして、私の右足には、嵌めた覚えのないアンクレット、そのアンクレットの端から細い１メートル半ほどの鎖が伸びており、その鎖は何故か横に寝ている昨日知り合ったばかりな筈の女性の左足に嵌ったアンクレットに繋がっていた。

もしか、これはお互いを重石にした足枷というものではないだろうか。

そう結論付けると私は、右足のアンクレットをはずそうとした。がどうやら鍵ではなく金具で嚴重に止められているので、道具なしでははずせそうになかった。鎖も、ネックレスになりそうなほどの銀鎖に見えるのに引っ張っても切れる様子はなく、自分の手が痛いだけだ。

この拘束はどうしても外れそうにない。そう判断した私は相手を見た。

「この状況、説明できる？」

そう訊ねたところ、どこか途方に暮れた目で私を見返した。

「先日おいでた連邦特使の方ですよね、どうしてここにいらっしや

るのでしょうか？」

そう言われて、私のほうも聞き返す。

「ここはいつたどこ？」

「実は、私の部屋です」

そう答えられて、私は頭を抱えた。もしかして、不法侵入者だと思われているのか？

軽くこめかみを押さえて、私は、アンクレットを指差した。

「これに見覚えはある？」

彼女はかぶりを振った。

互いに質問しあっている間、埒が明かない可能性が高い。私は思い出せる限りのことを正直に話すことにした。

惑星移民連邦、大陸の地区ごとに分かれた国家の連盟で成り立っている。しかし少数民族で作られた小国家も多数存在する。この国、小王国テュポーンもその一つ。近隣の国とは交わらぬ鎖国状態の島国だ。そういう国々に定期的特使を派遣し、視察を受けることは、移民惑星法で、定められている。私は、昨日船で連邦特使の一員としてこの国に降り立った。私は年齢も若く。総特使の秘書という名目で一員となった。

港からすぐに窓を黒く塗られた車に乗せられて、王国宮殿に向かう。街や道はまったく見えず。闇の中、息を殺して再び扉が開くのを待った。

車から降り立った次の瞬間目がちかちかした、何もかもが白い。闇に慣れた目には刺激が強すぎた。技官の一人として同行した夫に手を取られて立ちくらみの発作に耐えた私は私たちの前にずらりと並ぶ白衣の女たちに気付いた。

手を顔の前に組むと深々と頭を下げる、この国独特の礼のあと彼女らは私たちに背を向けた。着いて来い、その合図だと見て取った総特使はそのままあとを追って歩き出し、そのあとを私たちが続いた。

この国はやや湿度が高く、固い生地で作られた紺色の衣装は不快だった。女たちの着る薄い軽やかな衣装がうらやましくもあった。

行った先は巨大な広間で、玉座に座る、年齢不詳の女と、その周囲に集う長い髪をたらしした十数名ほどの老若男女が私たちを出迎えた。長い髪をたらすのはこの国の習慣なんだろう。最初に案内をした女たちもそうだった。

この国の者たちは髪も肌も色素が薄い。ほとんどが白髪と見まごうプラチナブロンドだ。

玉座に座る女が、この国の女帝ペチュニア。その背後に、ただで

さえ白い空間に、ひときわ白い人がいた。

肌も髪もまったく色がなく瞳だけがペリドットの緑色。着ている衣装も白く、飾りもつけていないのでかえって悪目立ちしていた。

女帝とその周囲はその白い人を除いて、衣装の上に何かしら色鮮やかな装身具を飾っていたのでぽっかりと浮いて見えるのだ。

私は編んで結い上げた髪の後れ毛を気にしながら。ちらちらとその白い人を見ていた。

この国は私の住む大陸とはやや離れた島国なので、きわめて閉鎖的だ。

実際大陸にこの国の情報はほとんど入ってこない。

風俗も習慣もまるで違うらしいという噂で知っていたが、それがどれほど違うのか直接知る機会はなかった。

帝政を執っていることは知っていたが、その権力構造も私はほとんど知らない。

だから、女帝はわかってても、その周囲にいる人間が、どのような身分なのかは見当がつかい。ましてや、その背後に立つ異様な白い人がどのような事情でそこにたっているのかも理解できない。

総特使の提出した書状を一瞥すると女帝は私たちに下がれと手を振る程度の合図をよこした。総特使は慇懃にそれに従う。私たちは軽くあしらわれるようにしてその場を離れ、再び女帝に連れられて王宮の中を進んだ。

一度女帝は立ち止まるとばらばらになって、私達それぞれにパートナーを組むように横に來た。そのまま全員手をとられて、ばらばらにそれぞれの場所に連れて行かれた。

連れてこられた場所はベッドと洗面台がある簡素な部屋だった。

洗面台の脇にカーテンのかかった入り口があり、そこはトイレとシャワーが付いていた。

そして、ベッド脇の棚に私の当座の着替えと、アメニティの入った小さめの鞆が置かれていた。それらを確認していた私の背後で鍵のかかる音がした。

あわててドアに飛びついたが、押しても引いてもスライドさせても何をやっても扉は開かなかった。

ドアを叩き破れそうなものがないか部屋の中を物色する。

しかし、自分の荷物以外は作りつけの家具しかない部屋にそんなものがあるはずもない。念のため棚を覗いたが中には食料品と水がぎっしりと詰まっていた。

今、自分のおかれた状況は間違いなく軟禁。しかし一介の使用人が連邦特使、国際問題に関わる人間を監禁しようと単独で考えるとはいにくいので、おそらくこの国の上層部の決定なのだろう。私がこの国を訪れたのはこれが最初だ。だから、これがこの国の普通の対応なのか今ひとつ理解できない。

当てが外れた。これでは、仕事の合間を縫って探し物などとても出来ない。

夫も同じ目にあっているんだろうか。そう思いながらベッドに座り込む。

食欲はまるでなかったが、水だけは飲んだ、それが私の最後の記憶。

「あの水に睡眠薬でも仕込んであった？」

不意に記憶を辿って思い出した、水を飲んだ後の記憶がぼつりと切れている。

「お部屋に用意したものにそんなもの入っているはずがないのですが」

そう、目の前の女は昨日、私を軟禁した張本人だった。その女と今度は一緒に別の部屋に軟禁されている。それも鎖でつながられて歩くことには支障がないが、走るとなるとよっぱど息を合わせないと、どちらかが転倒して重石になってしまう。

「そういえば、まだ名前も聞いてなかったわね、私はフェリシア・セツコ」

「イリユージア、そう呼ばれています」

イリユージアは口の中で小さく呟いた。

「そっちは何か変わったことがなかったの？」

目が覚めたら私がいた意外に。

「ラドウさんから、今日は部屋でおとなしくしているよう命じられました」

「本当はもう仕事に行っていないければならないわけ」

こつくりとイリユージアは頷いた。

「私は、本当は、内親王殿下についていなければならないのですが」

「内親王殿下って、誰？」

「イーシア様です、陛下の末の妹君に当たられます。私はもともとイーシア内親王殿下つきの女官ですから」

「あれ、それじゃ、昨日私の案内ってそもそも貴女の仕事じゃないんじゃないの？」

姫君付の女官が、わざわざ遠方からの客人の接待をすることは普通ないのではないか。

私は女官という職業を良く知らないが、極めて仕事が細分化されていると聞いたことある。

「あの方の周りの人は、いろいろ借り出されるんです、どうせ暇だらうって」

内親王殿下といってもあまり厚遇されている人ではないようだ。

「仕方ありません、あの方は気がふれているのですから」

「は？」

私は続ける言葉を失った。

「正気ではないのです」

その時、イリユージアの内親王殿下が誰かわかった気がした。あの真っ白な人。一人だけ浮き上がって見えた彼女だ。

「普段はおとなしいのですが、目を離れた隙に自分の体を傷つけて流れる血をじっと見ていることが多くて、別に暴れたりはしないのですが」

間違いない、そのために装身具をつけられなかったのだ。自分の体を傷つける道具を与えないために。

「いったい何時からそうなの」

「私が物心ついたときにはもうそうなっていたと聞いています」

「そのとき、彼女は大人だった？」

そう聞いたのは、のっぺりとした凹凸に乏しい顔立ちで、さらにその色彩も淡く単調なこの国の人間の年齢が読みにくかったからだ。女帝ペチュニアも、記録を見た限りでは、もう少しで初老の年齢になるはずなのだが、周囲にいる人間と年齢差が良くわからなかった。

そして目の前のイリユージアは、私より、っすだけ年下のような気がする。そうすると、イーシア内親王はだいぶ年上だ。もっとも姉が初老の年なのでそこから逆算してもそれくらいはわかるが。

「それで、どうして私たちここにいいのかしら。私が自力でここにたどり着いたなんて思っていないわよね、だってあの部屋に鍵をかけたのはあなたでしょう？」

「そうなんです、だからそれが不思議で。でも、特使がいらしたの
はこれが最初ではないのですが部屋に案内した後、鍵をかけるなん
て言われたのはこれが初めてです」

「初めてなの、個室に軟禁しろなんて命令を受けたのは」

「ええ、普段は、そのあてがわれたお部屋の階層すべてを閉鎖する
だけです」

「どっちにしる軟禁じゃない。」

私はがっくりと肩を落とした。しかしだ、総特使達も私達と別の
場所に監禁されている以上、助けは望めそうもないということだけ
わかった。つまり自分で何とかするしかない。

扉には鍵がかかっており、窓はない。そこで私は重大なことに気
がついた。

「どうやってトイレに行けばいいの？」

目覚める前にいた部屋なら、トイレと浴室が付いていた。しかし
外への扉を除けば、他に出入り口がないこの部屋にそういう施設は
付いていなかった。

「ラドウさんがたぶん様子を見に来ると思います」

「ここに閉じ籠っていると命令した人ね」

その人物がこの場に現れたら、事の次第を絶対に問いたださなけ
れば。そして私の足首のアンクレットを見下ろして、これがあるっ
ていうことは、問題のトイレも二人で入らなければならぬってこ
とで、昨日会ったばかりの人間とそんなことを……。

とにかく待つしかない。

そう考えた私たちはベッドに座って、所在無く時が過ぎるのを待
った。

ふいに鍵の開く音がして、扉に顔を向ける。入ってきたのは見知らぬ男たちだった。数は三人、この国の民族衣装を身に着けて、その手に持っているのは細長い刃物だった。明らかに殺傷沙汰が目的としか思えないそのいでたちに、私達は息を飲んだ。

「あれが、貴女の言うラドウさんじゃないよね」

そう訊ねた私の喉は緊張でひりついた。イリユージアは怪訝そうな顔で違うと言った。

私達の前にいる男たちは大きく刃物を振りかぶった。

「床に座っていて」

私は硬い声でイリユージアに指示を出した。私は足かせのせいで動くことが出来ない、ここに立っているだけ。

刃物が私の肩に振り落とされようとしたとき私は体を前に出し、その男の二の腕をつかんだ。

腕をつかんだ状態で足を払う。体制を崩した相手から武器を奪い取った。

おろおろと立ち上がりそうになったイリユージアに私は厳しく言った。

「いいからしばらくそこに座っていなさい」

そして、奪った武器でもとの持ち主の太ももに切りつけた。

「潰すんなら腕より足、腕なら戦力半減、足なら十分の一に落ちる」
護身術の教師の言葉を唇に載せながら、残りの二人を伺う。

重石がいる以上私は動けない。向かってくることを返り打つしかない。自力で動ける重石ではあるが、予想できない動きをされると、こちらのバランスが崩れる。

体を硬くしてうずくまっているイリユージアを横目に私は再び武器を構える。

最初のひとりがやられたのをみて、ふたり同時に仕掛けてくるようだ。

私はゆっくりと息を整えた。

一人の武器を受けてもう一人が切りかかってくるのをとっさに足払いを欠ける。やろうと思って出来ることでは本来ない。だがそれぞれの武器が見事に相手の体を傷つけた。二人同時の攻撃が、見事に相打ちの体勢になったのだ。

二人同時に倒れたのを見た瞬間に体が動いた。

私は身軽く二度飛び上がり、一人ずつ、膝関節を踏み潰した。

硬いものが割れる音がして、嫌な感触が足裏に残ったが気力で振り払う。

「イリユージア、立ちなさい、ここから出るよ」

「でも、ここにいろって言いつけられて」

「こいつらとそのままここにいるなんて冗談じゃない、仲間が来たらどうするの」

イリユージアは渋々立ち上がった。

「適当に、人気のない、隠れられそうな場所を考えて」

私がそう言くと、イリユージアは、外をうかがうように扉を覗いた。

「人気のない場所がいいんですか」

「そう、出来るだけ、人のいない場所がいい、何が起こっているのか見当も付かない。だからしばらく隠れていたほうがいい」

イリユージアはベッドの下から小さな箆笥を引き出し、白い衣装を取り出すと、その衣装を私に着せ掛けてくれた。イリユージアから借りた衣装は頭まですっぽりと隠れるフード付きのものだったので、私は、この国にはまずいない黒髪と制服を隠すことが出来た。

衣装に付いたフードは出来るだけ目深にかぶり顔を隠す。

「あそこなら、しばらく隠れていられるはずです」

私たちは連れ立ってそのまま小走りに部屋を脱出し、そのまま白い廊下を歩き始めた。歩き始めてしばらくして、ここがやや煤け

た埃っぼいうらぶれた雰囲気のところであることに気づいた

最初に通った廊下は曇りない透明感さえ感じる白さだったが、壁も床も安っぽい間に合わせたこの場所は、基本的に使用人のみがい、女帝や、その廷臣達が見ることもないのだろうと想像する。

ゆっくりと息を殺して進む、わずかな物音にも肩を震わせて壁に沿って出来るだけ身体を隠そうと身を縮めた。

「おかしい、人がいないなんて考えられない」

イリユージアが怪訝そうに周囲を見回した。

歩きたびに二人を繋いだ鎖がシャラシャ音を立てる。その音にびくつきながら歩いていた私は、イリユージアが考え込むのを止めた。

「何か起こっているの確定なんだから、とにかく急いで隠れる場所まで行きましょう。考えるのはその後にしなさい」

再び歩き出し、非常扉と思われる場所から外階段に出た。その階段は建物に巻きつくように取り付けられている。

そして初めて私はこの宮殿の外観と周囲を見ることが出来た。

私の予想通り、城壁も白く雲の様な浮き彫りで装飾されていた。

城の周囲には同じく白いやや小規模な建物が点在しており、その周囲は植物が生い茂っていた。

そして、一つだけ、どす黒い塔に似た建物が建っていた。

「あちらは、ほとんど人の出入りがありません」

そう言っ、見下ろした庭園も周囲の建物の周りにも誰もいなかった。

「いつもこんな状態なの？」

そう呟く私の声は掠れていた。

「いえ、周辺警備の人間がいないはずないんです」

その言葉に、私は身も凍りつくような恐怖を感じた。

その言葉に、私は身も凍りつくような恐怖を感じた。

これは正真正銘ただ事ではない。さもなければ常に持ち場に立たねばならない人間がいなくなるはずがない。

今も宮殿にいる他の仲間は無事だろうか。ずしりと胃辺りに重くのしかかってくるような気がした。

いっそ逆戻りして宮殿に戻り仲間を捜そうとも思ったがイリユージアを見て考え直した。

さっき狙われたのはイリユージアで、私はとばかりを食っただけかもしれない、しかし私のほうこそ狙われたのかもしれないし、二人共という可能性もある。

そうなると、彼らの元に私が戻ることは危険を倍増させることになるかもしれない。

ぐるぐると考えて、それでも私達は歩いていた。

そして、一つだけ浮き上がった。どす黒くて不気味な建物にイリユージアは私を連れて行つた。あちこちでたために増設したような、そんな無秩序な建物だ。

「ここなら、ほとんど人は来ません」

そう言つて、扉を開けると、どこかすえた臭気がこもっていた。

「ここは、霊廟です」

そう言われて、私はかすかに鼻をつく臭気は墓土の臭いかと納得した。

「この部屋はなに」

「祭壇を作る場所です。定期的に儀式があるので、そのときの準備をしたりして」

「鎮魂の儀式みたいなものかしら」

「ここはフェデルの廟ですから、ここを鎮めるのはイーシア様だけなんです」

この墓所の地名だろうかと思つたがイリユージアは違つと言う。

「ここはフェデルのための廟です、今、生きていらつしやるフェデルはイーシア様のみですから」

そう言つて床の上の本を拾う。

「これはその伝承を記されたものですが、何で落ちていたの？」

フェデル。聞いたことがあるような気がするが、たぶん、この国の伝承か何かに入っていたのかも。

「おなか、すいたな」

心からそう呟く、思えば眠りに落ちる寸前に飲んだ水が最後の食事だった。こんなことになるのなら、あの食料に手をつけておけばよかった。

どの道薬品入りなのは同じでもわずかながらカロリーになったは

ずだ。

「あちらに確か、食べられる実のなる木が植えてあるんですが、そこまで行きますか？」

そう言われて、私は迷うことなく立ち上がった。耐え難い空腹に苛まれていた。

外側に行くのは不安なので、建物の内側を通っていくことにした。廟というだけあって、廊下の両端の扉には、氏名と生没年が刻まれている。見るとはなしに見ているうちに奇妙なことに気が付いた、全員が、名前のどこかにフェデルと付けられている。そして、ほとんどが、十歳になる前に死亡している。三枚の扉は、連続して一、二歳で死んだ子供のものだ。

一番長生きしているのは私が見た限りで十三歳だった。

「フェデルって、早死にという意味なの？」

ふと考えたことを呟いたが、それが間違いであることはすぐに気づく。イーシア内親王もフェデルだと、さっきイリユージアは言ったのだ。

私の母親と同年代で、それに彼女はまだ生きている。

「愚帝フェデルです、この国を滅ぼす、伝説の帝王。だからフェデルが早く死ぬのは吉祥と言われています」

その言葉を私は反芻してみた。そして、恐ろしい可能性に思い当たった。

「言っている意味、分かってる？ 名前ってね、生まれた後に付けるものだよ」

醜悪な、あまりに醜悪な構図だった。おそらく、何らかの政治的あるいは立場的に不都合な赤ん坊が生まれたとき、その赤ん坊にフェデルと名づけ、そして、事故、あるいは病に見せかけて抹殺する。そして、殺した理由はフェデルだからと、自己欺瞞でごまかす。

自分たちは悪くない、国を滅ぼす災いを消したのだと。

そして殺された赤ん坊は、ここに納められる。たとえタイミングが狂って殺し損ねたとしてもほとんどが成人するまで生かしておいて

はもらえなかったのだろう。

「イーシア内親王が死なずにすんだのは、狂ってしまったからなの？」

問いかけの形をした確認だ。イリユージアも答えない。

「特使を軟禁したりしたのも、この秘密を探られないため？」

この質問にはかすかに頷いた。建物の反対側の緑地に蜜柑に似た果実が実っていた。

食べてみると酸味はほとんどなく、ただ甘かった。

一つだけ食べて胃を落ち着かせると、数個もいで、再び建物の中に戻る。

「私達、いつまでここにこうしていなければならないんでしょう」
そうイリユージアは問いかけてきたが、返事は期待していないようだ。

「貴女の言うラドウさんが迎えに来てくれると思う？」

「様子を見に来るといつていたから、あの状態を見れば、探しに来てくれると思います」

そこまで聞いた時、扉を蹴破る破壊音に私達は振り返った。

破壊された扉の向こうに再び刃物を持った男達が現れた。

万事休すか、さっきのような幸運は二度は続かないだろう。

「一つだけ、聞きたい、どうしてこんなことになったの？」

「あの男が邪魔をしなければお前達は、本当ならばとっくに死んでいたはずだった」

その言葉に、ある風景が重なった。それはとても真つ赤な光景。

上半身潰れた父親、私は震える母親の腕の中で、それを見ていた。

「どうということ、まさかあんた達が父さんを」

あまりに幼かったのでその時の詳細は覚えていない。ただ父の死の直後に母が行方をくらまし。その直後に私は、父の死を知って駆けつけた親族の元に引き取られた。母の行方はそれきり途絶えた。母の残した装身具がテュポーン独自の製法で作られたものだと言えが付かなければ、いまだに分からなかったろう。

だが、テュポーンに付いた翌日に父の殺害実行犯に遭遇するとは思っていなかった。

「何で、そんなの、私達が何をしたというのよ」

絶体絶命、そんな言葉が脳裏をよぎった。それでも一縷の望みをかけて立ち上がる。おそらく相手は職業暗殺者で、私が受けた短期間の軍事教練では、太刀打ちできないと分かっている、あの時盾になってくれた父のために。

振り下ろされた刃物をかわして身を捻ったはずが肩を浅く切られる。

再び、刃物が頭に飛んできて私はその場で床に転がった。

そして、次の瞬間、何故か相手のほうが背後にいた誰かに殴り倒された。

茫然とその場にへたり込んでいる私と、その脇で硬直していたイリユージアに夫が駆け寄ってきた。

殴り倒された男たちは、白地に、黒い模様の付いた服を着た、テュポーンの警備兵と思われる面々に連行されていく。

「どうしてこんなところにいる？」

「さつき別の人に殺されそうになって、ここまで逃げてきたの」

私は正直にありのままを語った。

「それはそうと、いったいここで何が起こったの」

「クーデターが起きた」

間髪いれずにもたらされた答えに二の句が告げずそのまま沈黙する。

「ペチュニアは強制廃位、現在の帝はフェデリシアだ」

「フェデリシアって」

「ペチュニアの異母妹にあたる。彼女がこの国の最後の帝になると、先ほど宣言した」

彼の話によれば、事故で、五年間国を離れ、大陸で暮らしていたことがあり、そのときの経験を踏まえて、もはや逼迫した国の情勢を立て直すには連邦に加盟し援助を求めるほかないと、新女帝は宣言し、前女帝である姉とその側近を一気に排斥したのだとか。

帰国してから、二十年間水面下で同志を集め本日でたく決起した。それらの情報を少しずつ組み立てていくうち、ゆっくりと、形になってきたものがある。

「彼女はどこ」

立ち上がり、歩こうとする、アंकレットの足枷で身体のバランスを崩した。

「イリユージア、謁見の間まで案内して」

「手当てしないでもいいんですか？」

白い布を通して肩から出血しているが、そんなものはあとでいい。

「心配しないでいいわ、この服なら弁償するから」

「私が言っているのはそういうことじゃなくて」

私達とはとにかく、王宮の入り口まで辿りついた。

「二人とも無事でしたか」

背の高いほっそりとした女が、そこに立っていた。

「ラドウさん、イーシア内親王、いえ陛下は」

「あちらに」

ラドウは先頭に立って歩き始めた。その時、初めて見る顔の女性が私達の元に駆け寄ってきた。

「ラドウ様、前女帝が陛下に襲撃をかけました」

その場で崩れ落ち、泣き出しそうな顔で、そう告げる。

「どういうことよ」

「おそらく、陛下の宣言を取り消させようとしているのでしょう」

ラドウが踵を返して走り出す。私はイリユージアと手を繋いであとについて走り出した。

広い吹き抜けになった場所で、ラドウはその方向を指差した。

三階ほどの高さの手すりに、追い詰められた白い後姿が見えた。

「そのようなことをしても無駄です。ペチュニア前陛下。その方を殺すことは出来ない。その方がお隠れになったとき、この国の王室は解体され、共和制に移行いたします。貴女方はすべての権限を失うだけです」

ラドウが力強く断言する。その声に振り返ったのは、フェデリシア新女帝だった。

手すりから身を乗り出して、こちらを覗き込む。そして満面の笑みを浮かべた。

そして身軽く手すりの上に座り ゆっくりと白い髪をかきあげたように見えた。そして、唐突に、白い衣装が赤く染まった。身体がゆっくりとかしぎ手すりの外側に倒れていく。

重力で人の身体の潰れる嫌な音がした。

あふれる血で判別の付かなくなった人であったものに私はゆつくりと近づいた。

「母さん」

口の中で呟く。残骸に向かって。そして気づく。赤と白の中碧いものがある。

彼女が隠して着けていた唯一つの装身具。碧いロケット。

中には男性の細密画、それはイリユージアの部屋においてあった小さな肖像画のネガとポジ。あちらは白い髪に黒い肌の男。こちらは黒い髪に白い肌。父を殺した誰かが気づかないように。そんな細工をしたのだろう。

海難事故で漂流していた母を、見つけたのは、観測船乗組員だった父だったという。

郷里に帰りたいかと尋ねればかたくなに首を振った。そのまま父のところについてしまった。母。

「イリユージアは母さんの子供ね、だからあの部屋に父さんの肖像画があった」

ラドウは無言で頷いた。

「あの人は、どうなるの」

「これから、自分で働くか、さもなければ、最低限の食事だけを保障する貧民施設があります。そこに行くことになるでしょう」

「鍵のない檻に、死ぬまで閉じ込められるってことか、最高の復讐ね」

ロケットを母の首の辺りに返す。

「この結末に驚いてないのね」

「あの方は、生き延びたことを呪っておられました。ずっと死ぬる日を待ち焦がれていたのです。今日、行方の知れなかったフェリシア様の無事を確認し、イリユージア様を託された。そして、復讐も果たされた。もうあの方が生きている理由がないのですから」

上のほうで、警備兵に、前女帝が拘束されている。おそらくこのまま王宮から叩き出されるのだろう。

「馬鹿よね、あのままほうっておいてくれたらよかったのに、そうすれば、母さんは一生ここに帰ってなんかこなかったのに」

イリユーシアはその場に座り込んで茫然と遺骸を見ている。そしてしゃくりあげ泣き崩れた。

「あの方たちも縛られていたのですよ、愚帝フェデルの伝説に、どうあっても殺すか監視下に置かなければ自分たちが滅ぼされると。この国のためだと本心から信じなければこの仕組みは成り立たないのです」

ラドウははつきりと言い切った。

「心から信じればこそ、良心の呵責に縛られずにすむではありませんせんか」

結局、私とイリユージアは強制退去させられることになった。

フェデリシアの遺児がこれ以上国内にいるのは望ましくないという政治的配慮だった。

「もう目的は達したろう、お前は捨てられた子供じゃない。お前の母親は無理矢理連れ去られたんだ」

そう私に語った夫の言葉に私は笑った。

そんな風に思われていたとは今の今まで気づかなかった。私の目的はそんなものじゃない。じゃあ何なのかと問われても答えられないけれど、目的は何一つ達せられず、達せられる機会永遠に消えた。

白い髪を束ねた輪を摘み上げる。父の墓に備えてくれと。意味のない行動だ。

私は理解できなかった。母が何故あの時笑ったのか。死を選んだその理由、姉へのあるいはこの国の王族すべてへの復讐だったのか、共和制を打ち立てるための義務感か、それとも生きていることが辛すぎたのか、それとも父の後を追ったのか。

それを理解する前に彼女は逝ってしまった。だから私はイリユージアのように彼女のために泣けない。

今度は大きく開いた窓からこの国を見ることが出来た。

この国は数年続く凶作のため食料自給率が極端に落ち込んでおり、犯罪発生率も高くそのため、表大通りのはずなのに、裏街道のように寂れていた。

もちろん、この状況を目撃したら、総特使は連邦に報告する義務が生じる。だからこそ窓がふさがれたのだ。

ここまで危機的な状況になっても連邦の介入を拒み援助要請も出来なかった理由の一つにフェデル狩りがあったのだろう。

うらぶれているのは街が喪の装いに染まっているせいかもしれない

い。

皮肉なことに、国を滅ぼすと忌み嫌われた愚帝フェデルは、救国の英雄として、その死を大いに惜しまれた。だからこそ、フェデルの子供がこの国にいてはいけないという理由もわかる。共和制を敷くための幹部たちの迷惑にしかないだろう。

「お姉さん、どうして私が妹だとわかったのですか」

イリユージアは緊張の面持ちで訊いた。

「お前達は死んでいたはずあの男はそう言ったでしょう？ 父さんが奴らに殺されたときあんたは母さんのお腹にいたのよ、あの時本当は死ぬのは母さんのはずだった、だから」

イリユージアは隠されて育てられていたため、王宮の外に出たのはこれが初めてだと言った。最低限の教育は与えられていたようだが。

あの窓のない小さな部屋はそういう理由だったのか。

窓の外から、まだ見える巨大な王宮を眺める。

その向こうにフェデル廟もかすかに見えた。

その王国には伝説があつた。愚帝フェデルの御世に王国は滅ぶと。王国の滅びた今、それは無害な御伽噺

8（後書き）

辛気臭い話ですが、最後まで読んでくださり有難うございます。
娘のフェリシアサイドだけでなく、母のフェデリシアサイドも、
そのうち書くかもしれません。

セツコは、雪虎という当て字があります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4297w/>

愚帝 フェデル

2011年9月12日03時20分発行